

山本宣治と組合教会



佐々木敏二

京都選出の労農党代議士山本宣治が右翼に虚殺されたのは一九二九年三月五日であるから、以来三十六年の月日が流れ去っている。

しかるに発表された山宣関係の文献は非常に少ない。山宣の死後刊行された主なものは、政獲労農同盟編『労働者農民の代議士山本宣治は議会に於て如何に斗争したか』（希望閣一九二九）高倉輝・安田徳太郎編『山本宣治全集全八巻』（ロゴス書院一九二九）安田徳太郎・山本英治編『山本宣治選集全五巻』（新興出版社一九四八）西口克巳著『山宣』（中央公論社一九五九）田村敬男編『山本宣治―白色テロは生きている―』（室賀書店一九六

四）などである。それらに収録されているもののほとんどは、山宣の著作・新聞雑誌論文・議会その他の演説や講演などであり、生物学者・産児制限論者・労農運動の闘士・無産政党の代議士という側面を示すものは相当の量にわたり収められている。しかし山宣の全生涯を語る資料、またその時々人間関係などを語る資料は全く発表されていなかった。そのため、山宣資料はたびかさなる家宅搜索によってほとんど失われ、山宣の生涯については関係者からの聴取り以外には知りえないのではないかと考えられた。というのも、青年時代の山宣については誰の編集した年譜にも手記されていることのみが見られ、それ以上のことがのべられたことはない。山宣の

生涯の詳細が知られていないことが、一部では山宣を偶像化する傾向となり、また一方では性教育の面のみで山宣を考える傾向もひきおこしたりしてきた。

しかし、山宣の資料は失われてしまわずに生家花屋敷に陽の目を見ずにねむっていた。昨年夏、一週間余花屋敷に資料調査に行った。その時最初に書齋を見た。そこでは生物学、性科学関係の原書が本棚の大部分を占め、社会主義関係の文献はほとんど見られなかった。押入の行李には写真がつまっていた。次に布団部屋に案内されたが、そこには山宣自身が設計した資料戸棚があった。その中の資料の大部分は、性教育講義の資料やノート・学会誌・性教育についてのアンケート・同志社予科生のレポート・『産児調節評論』発送用住所カード・書籍カード・ビラ・新聞などがあつた。これらの他に一緒に入れられていた別種のもは、山宣の葬儀の際の資料、つまり、弔問客記名録・弔電綴・弔辞・葬儀前後の書簡・新聞切抜帖などであり、側の棚にあつた帽子・ステッキなどの遺品とともに虚殺当時を伝えるものであつた。調査に行つた一行は、資料もこれだけかと思つたし、山宣

の長男英治氏もそう思っておられた。しかし、土蔵の二階にもあると聞き、入ってみると、薄暗い中に山と積まれた資料があった。その中から、書斎でも布団部屋でも見られなかった資料が続々発見された。その資料は、時期としては山宣が神戸中学を受験した一九〇一年から虐殺後までを含み、日記・書簡・原稿・ノート・新聞切抜帖・メモ・ピラ・ボスター・新聞雑誌・蔵書等々からなるもので、

これは山宣の生涯とその時々の人間関係ををはじめとして、思想形成過程・活動の状況などをはつきりと示すだけの量がそこにあった。

2

これらの資料は、現在は山宣研究のために同志社大学人文科学研究所第二研究（キリスト教社会問題研究会）に移管され、整理されつつある。これらの資料の特徴は、まず第一に

は、青年期は日記・書簡によっ

て明らかにされることである。

青年期について

は、従来は、一

八八九年五月二

十八日山本亀松

・多年の一粒種

として新京極に

生れ、両親が四

条教会（組合教

会）の信者であ

ったため、宣教

師の宣を採って

宣治と命名され、クリスチャンとして教育されたこと、一九〇一年神戸中学に入学したが身体虚弱のため中退し、宇治花屋敷で園芸に従事したこと、一九〇六年園芸家を志して大隈重信邸に見習いとして住み込んだこと、一

九〇七年大望を抱いて單身カナダ・バンクーバーに渡り、約五年間、皿洗・コック・ホテル

給仕・園丁・列車ボーイ等々職業を転々としながら小学校・中学校に学んだこと、一九一

一年十二月父病氣のため帰国し、翌年同志社

普通部四年に入学、一九一四年三高二部入学、

一九一七年東京帝大理学部動物学科入学、一九二〇年「イモリの精子発達」の論文で卒業、以後同志社大学予科講師に就任し、人類

生物学・性教育を講ずるようになったこと、一九二一年京都帝大理学部講師に就任し、大

津臨湖実験所勤務となったこと、などが知られている。しかしその詳細は知られていない。この期の大半を山宣はクリスチャンとして各地の組合教会で教会生活を送っている。

それは日記・書簡が詳細に語っている。

同志社講師時代は新聞切抜帖や産児制限講

演会のピラ・メモ・ノート・アンケート等々から知られるし、一九二六年日本学生社会科



学聯合会事件で家宅搜索をうけたのが契機で大学を追われて以後のことについては、無産政党運動その他についての新聞切抜帖・山宣宛書簡・未発表原稿・ノート・メモ等々から知られる。これらの資料の研究がすすむにつれて、山宣の人の思想とが一層はつきりと描きうるであらうし、そればかりでなく山宣資料の中に含まれている現在人手困難な多くの無産政党・労働組合・農民組合関係の資料は、現代史研究のために大いに役立つであらう。

今回は、山宣資料の中の最初の時期、一九〇一年神戸中学に入学した頃から若干紹介してみようと思う。

3

当時山宣の両親は新京極でワンピースショップなる今でいうアークセサリーの店をやっており、宇治には山宣を育てるための別宅があり、山宣はそこを往復しながら生活していた。日記は毎日の学校での学課目などのほかは特に目につく記入はないが、日曜ごとには教会通いの生活が記されており、京都時代は四条教会、神戸中学に入っでは神戸教会で、組合教会のクリスチャンとしての生活を送っ

ていたことが判る。

「明治三十四年二月十七日（日）……夜四条教会大挙伝道演説会に行き大いに感ずる処あり……」

「二月二十四日（日）朝説教を聞かんがため四条教会へ行く」

「三月十日（日）午前十時説教を聞かんがため四条教会に行く」

「三月十七日（日）午前十時四条教会へ説教（復活）を聞きに行き、午後疎水へベースボールをしに行き、夜四条教会へ演説（精神上の同化力）を聞きに行く」

「三月二十一日（木）午後四時三十分梅田発神戸に到る、神戸に移住」

「三月三十一日（日）……夜神戸教会へ説教「主観的同化力」（岸田美郎）、「天地の哀情」（海老名弾正）を聞きに行く」

「四月九日（火）神戸中学校へ入学試験受験のために行き、算術・読書の試験を受く」

「四月十日（水）書取・作文・習字・体格の試験を受く」

「四月十一日（木）午後成績を見んがため中学校に行く、入学試験に及第す」

こうして教会生活を送りながら神戸中学に

入学し、神戸生活をはじめた山宣は、日曜ばかりでなく、祈禱会・聖書研究会・日曜学校にも積極的に参加しだした。日記の文章は特に変りばえしないので、山宣が聞いた説教の題と説教者を以下列記してみよう。

四月十四日（日）「楽天的のボーロ」原田助

五月五日（日）「基督の愛」原田助

五月十九日（日）「基督の初対面」原田助

五月二十三日（木）「神は我天父なり」油谷次郎七、「基督は我救主なり」長田時行

五月二十四日（金）「天国の信念」武田猪平、

「永生の信仰」貴山幸二郎

五月二十五日（土）「家庭」中江沔、「聖書」

湯浅吉郎、

五月二十六日（日）「基督教徒とは何ぞや」

原田助

五月二十七日（月）「人とは如何なるものなるか、今は覚醒の秋にあらずや」宮川経輝

六月十六日（日）「霊の情」原田助

六月二十三日（日）「基督の心」原田助

六月三十日（日）「確信」原田助、日曜学校

に出席

七月一日（月）「信仰の修養」松井文弥、「人

心束縛の弊」古木虎三郎



中学時代の山宣（第二列左より二人目）

曜学校に出席、

七月八日（月） 求道者懇談

会（進修館）

七月十一日（木） 聖書研究

会（〃）

七月十八日（木）

（〃）

こうした徹底した求道者生活のうちに一学期も七月十九日の終業式を迎え、九月十日まで夏期休暇に入った。休暇中は京都・宇治・神戸を往復しながら教会生活をする。

を中退し、四条教会で教会生活を送りながら、新京極の店を手伝ったり、宇治で園芸に従事しながら毎日を過ごしたようである。四条教会の牧師には一九〇三年十一月から牧野虎次がなった。牧野氏は若き山宣のよき相談相手であり、山宣は単調で発展性のない宇治での生活から抜け出そうとして牧野氏に相談をした。これについて一九〇五年十一月二十七日東京に商用で行っている母に、将来の方向についての手紙を送っている。

「東京日本橋通三 ワンプライスショップ

山本母上様

親展

京店にて 宣治

七月二日（火）「心霊上の革新」村上俊吉、
「十字架の福音」油谷次郎七
七月三日（水）「生命の道」岸田美郎、「人生の第一義」原田助

七月四日（木）「宗教と生活」岸田美郎、「愛の力」松井文弥、「今」原田助

七月五日（金）「敬神の益」吉岡弘毅、「――」宮川経輝、

七月六日（土）「基督教の勢力」デフォレスト、「祈禱の真意」宮川経輝

七月七日（日）「みあしの跡」原田助、日

七月二十四日（水）午前鉦町を散歩し鉦を見、……夜四条教会へ矯風会演説「日本矯風問題の中心点」平岩恒保、「家庭の中心点」井深梶之助を聞きに行く

八月一日（木）聖書研究会（進修館）

八月四日（日）「天父の事」原田助

4

このように綿密に記入されていた日記も、八月十日東京への旅行中で記入を終り、残余は空白となっている。その後病気で神戸中学

拜啓仕候、一昨二十五日は売上六十円に御座候。昨日曜も随分人出多く深さん来られ教会へ同道仕候。……扨本日午前牧野牧師の宅へ行きいろいろ私の考へも話し、アメリカの事情も承り候、此事は既に牧野先生よりも御手紙参るべき筈なれば既に御承知相成候はん、右に付小生の考へ（牧野先生の賛成を得たる所の）を陳述仕候間何卒御聞届願度、いずれも沈思熟考のものに御座候。

牧野氏に色々アメリカ談を聞きし後、牧

師は君は如何なる考へを抱くかと問はれ候に付、私の園芸に着手せし始めよりの事と既に兵役も近き事なれば其迄に修業に出るか又は花屋を始めたく思ふ事などを談じ候が、今より兵役を避けて渡米する事は能はざるにあらずといえ共、年少しかも一人子の親達の望をつなぐべき身にして、かく渡米せんには殆んど一か八か賭博の如くして、かかる事も年老ひて成功を急ぐ人か又は家にありても左程益なき人のする事にして、未だ年少く亦一人子の身がかかる危険なる近道をたどらず共、急がず進むべき正道を進む事が当然なりと懇々と諭され候。其から亦、今より花屋を開く事も此れ亦一生緑日植木屋に毛の生えた如き極劣等のものとなりて、終生録々として人後に落ちて生存競争場裡の劣敗者となるべく、且又四年後に兵役の控ゆるあり、亦此れに伴ふ父上母上も今から隠居すべき年にもあらず、局外者より見てもこれ又不得策なりと申され候、私思ふにいかにも其如く存居候。

抑其次は、宇治に居て栽培するも自家なれば氣持も違ひ亦栽培しても需要者もなく一向其業務手腕も進歩せざる故に、丁度兵

役迄四年あり他所に出でて修業し、其後徴兵検査を受け不合格或は合格を決め、入營するかして其らちをあげて後渡米したきと申せしに對し、牧師は、局外者なれば事情も分らざれ共先づこれこそ正しき道と思ふなり、先づアメリカに園芸家に行くにも多少の経験と技術を要することにて、タマからダメのものには取つく術もなきなり、例えば我（牧野先生）にても日本にて同志社の神学校を出でて多少伝道の経験あればこそ大学に入りて神学を研究する事も出来しなれ、タマから何もなきものにて成功し得べきものにあらず、……君の先に云ひたる如き実行すべき決心せば直ちに行ふべし、善は急げ、余は亦君の父母に手紙を出すべければ、君も父母に願ふ所あるべし、と申され候に付、かくの如く長文乱筆をかへりみず申上候。

私は昨今宇治におり候ても別に居なければならぬ人間にても此れなく、或は宇治でニワトリを殺し花を枯らすよりはよきかも知れず候。他日アメリカ生活の予備として規則正しき労働、他人の飯に馴れざるべからず、アメリカ行というもまかりちがえば

死あるのみ、いかなる痛苦も死に及ばず粗食激労位なきものは、妙華園に入らんとして止めし事を今にして非なるを覚え候。……尚行くべき所は下記の所に限らず候へ共、現今職業としてある中に比較的设备完全にして誘惑少き所と申せば、小生はやはり妙華園を押し候……日本は新進国なり、日本はアメリカに非ず、最完全なるものあらば何ぞアメリカに行くを要せん。しかし妙華園より更に良き所あれば好けれ共……かくして園芸家を志し妙華園に問合せしが、年末に「本科見習生は満員」と断われ、新年を迎えて、宮内省新宿植物御苑が早稲田大隈邸か酒井邸に奉公せんことを決心し、牧野牧師その他の紹介状を胸にして、一九〇六年一月九日上京、牧野牧師より大隈邸内湯谷礎一郎氏宛の紹介がまとまり、一月十九日より大隈邸に園芸見習として住込むこととなる。そして大隈邸時代が山宣に、社会運動と社会主義思想に目を開かせ、またダーウィンの進化論にふれる機会を与えることになるのである。

（人文科学研究所囑託）